Save The Tropical Forests

ウータン・

Hutan

47

森の通信 1998.4.21

—世界の森から—

● 「私たちは今日何を食べている?」
サラワク、油やしプランテーションの現場から
峠 隆一

● 山からの便り・最終回
「炭やき百姓はおもろいなあ〜」
雪国の巻・市井晴也

SARAWAK

◈ゴザの作り方を孫に教える。
家、舟、椅子、ゴザ、楽器 …。
全ての資材を与えてくれるのは、森。
その中での生きる術は、
絶えず若い世代へと伝えられる。

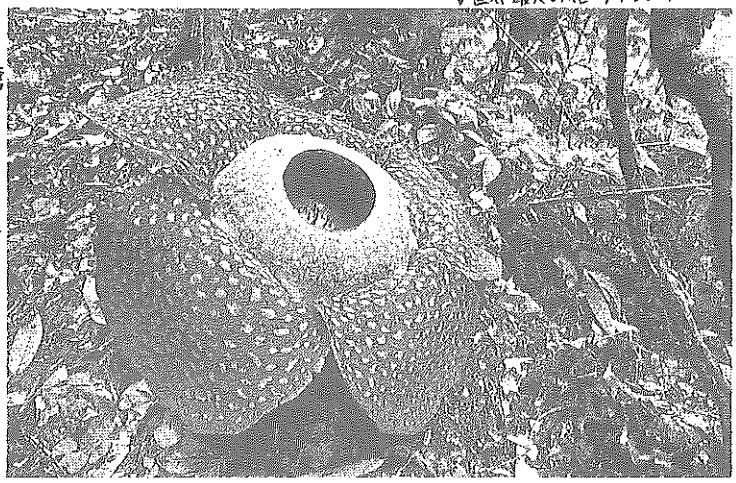
[photo & ward]
峠 隆一〔環境ライター〕

Save The Tropical Forests
ウータン
森の通信
1998.4.21
47

CONTENTS

3 …… 「私たちは今日何を食べている?」サラワク 油やしプランテーションの現場から/峠隆一
6 …… 世界の森から「アマゾンの森燃ゆ」
7 …… 連載⑤最終回「カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて」黒田洋一(JATAN)
8 …… ウータンニュース 「サラワク森林火災」
9 …… 「あつい情けに泣けたぜ サラワク」その② 荒木琢磨
12 …… ウータン総会報告記 牛田栄
13 …… 自治体キャンペーン報告 「大阪府編」西岡郎天
14 …… 山からの便り③ 「雪国の巻」市井晴世
18 …… 日本の森から「番外編」 徳島の山と川……
19 …… 会計より、お便り 井下祥子

▼世界最大の花 ラフレシア



ウータン活動報告

'98年1月～3月

98・1・25 関西熱帯木材使用削減委員会(以下「削減委」と略)・家具部会
1・27 通信「ウータン」No.46発送
1・31 削減委・自治体部会、全体会議
2・4 出前講座・アジア友の会「熱帯林の破壊を考える」/西岡
2・8 ウータン総会/大阪市立中央青年センター/講師:大田伊久雄(京都大教官)さん他
今年の主な方針①自治体キャンペーン--建築抑制、家具等、②国際的なキャンペーン、③国内林業地との交流、④調査・情報収集、⑤会員や物品販売の強化
2・14 削減委・全体会議
2・20 東チモール問題を考える会、AMネット等と「インドネシア関西緊急集会」開催
2・21 気候フォーラム・最後の運営委員会に参加/西岡
2・28 削減委・全体会議
2・28 JATAN、サラワク・キャンペーン委、パプア・ソロモンの森を守る会、地球の友と本年の方針・方向を聞く
3・5 関西環境NGOネットワーク・運営会議、4月26日PM1:30~に大阪市中央青年センタで「市民がつくるアースデイイベント--暮らしの中のエコライフ」集会を決める
3・14 削減委、最終原稿作成へ
3・15 講演会「京都会議が私達に教えたこと」/講師・猪俣栄一(徳島熱帯林問題研究所)さん

◎この冊子は再生紙を使用しています。
[表紙]新草本塗[古紙40%]
[中紙]バガス[55kg、非木材紙50%、古紙35%]

私たちは今日何を食べている？

——「環境に優しい」が「環境を壊す」。油ヤシプランテーションの現場から——　峠　隆一

油ヤシのプランテーション造成に反対する先住民族が、警官に銃撃され死亡。このニュースが昨年末、マレーシア・ボルネオ島サラワク州から飛び込んできた。開発反対運動ではサラワク始まって以来の事である。「そこまできたか・・」。私のなかにやりきれない思いが走る。

サラワクは、熱帯林伐採でその名を世界に知られている。だが、6、7年ほど前からか、「伐採の方がまだましだ！」との声が森の中から上がっている。同じ頃、日本では、「環境に優しい」と謳われた商品、例えば、植物性の石鹸や洗剤などが出始めていた。この二つの事実には強い関係性がある。

また昨年、ボルネオ島インドネシア側での森林火災が大ニュースになった。この森林火災は私たち日本人には対岸の火事に映るが、これまた、深く、実に深く私たちの日常生活と結びついている。以下、検証してみたい。

≪いい焼畑、悪い焼畑≫

今回のインドネシアの森林火災では、その主原因は「エルニーニョ」と「焼畑」であると位置づけられた。今、焼畑は悪者にされている。

しかし、焼畑とは何だろうか？　何をもって焼畑と定義するのか？　アマゾンのように、ハンバーガー用肉牛を育てる牧場を切り開くために、森に火をつける焼畑もある(ハンバーガー焼畑)。インドネシアのように、都会の住民を森に移住させたあと、好きに開墾させる焼畑もある(移民焼畑)。そして、私がサラワク州の熱帯林で延べ一年、先住民族と生活を共にしてきたなかで見てきた、先祖伝来の土地で続ける「伝統的焼畑」もある。

いろいろな焼畑があるに関わらず、定義が曖昧なままに「焼畑」を非難すると、真っ先にイメージされやすい伝統的焼畑がやり玉にあがる恐れがある。この場をお借りして、伝統的焼畑だけは擁護させていただきたい。

今、読者の目の前で先住民族が、焼畑の火入れをしているとする。そして一年後、同じ場所がちょっとした林に蘇るのに驚かれることだろう。種蒔きの時、棒で種用の穴を穿つだけで表土を残すからだ。さらに10年から20年後、二次林の育ち具合で土地の肥沃度を判断した先住民族は木々を伐採し、数ヶ月天日で乾燥してから火を入れる。火入れは年に一度だけ。面積も一家族2 ha 前後である。

現地政府は、そういう焼畑こそ「原生林破壊の元凶」と非難し、80年代後半から激しくなった国際的非難の矛先をかわしてきた。

≪伐採はまだましだ！≫

だがここ数年で、先住民族の間で「伐採はまだましだ」との声が高まってきた。そして92年4月、機会があり、先住民族にそう言わしめるもの——油ヤシプランテーション——の造成現場に赴いた時の衝撃は今も忘れられない。地平線の果てまで木という木が一本残らず剥ぎ取られている。その面積最低3～5000 ha。正方形換算で7キロ四方にもなる。そこは確かにほんの一月前までは、豊かな生命が数億年もの間、織り合いをなしてきた熱帯林だった。今、砂漠と化した。油ヤシだけを「植林」するために。

その村の男性セランさんは言った——「男たちが村を留守にした隙に、プランテーションの会社が俺たちの土地を壊していった！」

伐採はまだ、太い木だけを選んで半分以上の森を残し（もちろん周知の通り、それも大問題だ）、また、太い木を切り尽くした時点で企業はその土地を去るから、将来にはある程度の植生と生態系の回復の可能性もある。

だが、プランテーションは数億年続いた熱帯林の歴史に完璧に幕を下ろし、先住民族から土地と

土地の権利を永久に奪い去る。ひとたび造成されると、企業はその土地で百年単位で操業を行うからだ。その歴史はマレーシア半島部が証明している。

≪マレー半島で何が起きている≫

今世紀初頭、車の普及に伴い、その需要が急激に増加したのがタイヤの原料のゴムだった。当時、マレーシアの宗主国イギリスが、労働者確保のために行ったことは、インド南部タミル地方の住民をマレーシアに移住させる事だった。なぜなら、

- 気候がマレーシアに似ている。
- 植民地イギリスのやり方を知っている。
- 生まれつきの被差別民である。
- 体力があり従順

などの条件に適ったからである。その後の油ヤシプランテーション開発にもインド人は大量導入された。

マレー半島に限っていえば、その人口比率はマレー人、中国人、インド人で6：3：1だが、プランテーションの中になるとその比率は逆転する。マレー半島はどこに行っても、油ヤシかゴムのプランテーションを容易に目にする事ができる。旅行ガイドブックによれば「南国情緒を醸し出す」らしいのだが、そこには、百年前に移住してきた人々の子孫が住み続けている。

首都クアラルンプールから車で一時間。50歳くらいの男性が、10メートルはある鎌を使い、頭上にある油ヤシの果房をギシギシと切り落としていた。大人の胴体ほどもある果房がドスンと鈍い音を立てて落下すると、また次の木へ。コパルさんは、この作業を一日に何百回と繰り返す。

大きな果房は地面に落下すると、その衝撃でいくつもの実がバラバラと周囲に飛散する。すぐさま、男性の娘の九歳のレチマと六歳のカレセルビは、スリッパを脱いで散らばった実をスリッパで掃き集める。大きな果房も二人でよいしょよいしょと抱え、工事用一輪車に乗せ、道路脇のトラック集積場にまで運んでいく。

二人とも学校に行っていない。そして、こんな子どもたちは、80年のマレーシアの国勢調査では、10歳以上14歳以下で約2万2000人いることが明らかにされている（10歳未満の統計はなし）。

マレーシアでの平均月給は、食堂の給仕で300リンギ（約1万1000円。現在一リンギ35円前後）、工員で500リンギ、教師や銀行員で800リンギといったところだが、プランテーション労働者となると、その額、月に200から300リンギと最低レベルしか稼げない。その300リンギにしても、一人の労力によるものではなく、妻と子供たちを総動員してやっと掴み取ることができる額なのだ。

プランテーションで働く10歳の男の子セレシュに聞いてみた事がある。

――将来、何になりたいの？

「僕、英語の先生になりたいんだ！」

同行の現地NGO職員が、後でこっそりと言った――「無理だよ。自分の名前も書けないのに」

プランテーションで出会った子どもたちは、皆優しく素直な子どもたちだった。働く時もニコニコしている。小さいレチマもカレセルビもセレシュもまだ何も知らない。自分が何をしているのかを。例えば、この子たちが思春期になり、学校に行きたいなあ、違う仕事に就きたいなあと思ってももう遅い。小学校の卒業証書すらなくては、プランテーションの中で生きるより他ない。プランテーションの中で結婚をして子供を作り、その子供もまた…。マレー半島のプランテーションではその悪循環がもう百年近くも繰り返されている。

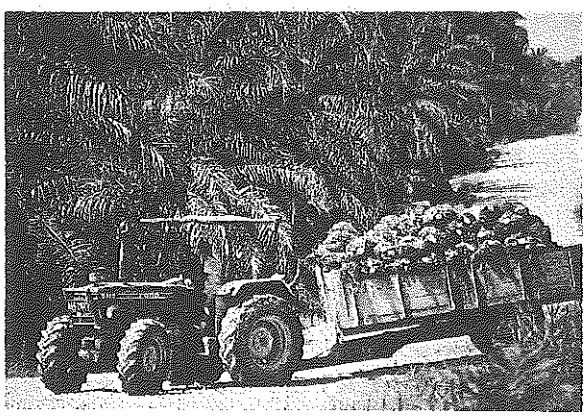
紙面に制限があるので詳細は省くが、マレーシアのプランテーションは農薬天国といっていいほど、ありとあらゆる農薬が使用される。例えば、ベトナム戦争の枯葉剤に使われた「2.4.D」や「2.4.5.T」も、急性中毒で危険視されている「パラコート」も全く規制がないまま使用されている。

油ヤシの果房を切り取る仕事が男の仕事なら、農薬散布という「軽作業」は女性の仕事だ。それゆえに、プランテーションの女性労働者には異常ともいえるくらいに農薬被害者が多い。指の変形、失明、流産などその被害例は三桁を数える。石につまづいた拍子に、運んでいたパラコート原液を

体に浴び、死亡した女性もいる。若い男性だが、農薬散布の仕事を5日間しただけで下半身不随になった人にも会ったことがある。

数年前、マレーシアの女性弁護士が、プランテーションの女性労働者 50 人を無作為抽出して調査したところ、健康な人はわずかに二人だけという結果が現れた。

現地ＮＧＯの職員はプランテーションをこう呼んでいる――『緑の監獄』



▼油ヤシプランテーション

≪パーム油を使わぬ人はいない≫

油ヤシから搾油されるパーム油は、大豆油に次ぐ、１６００万ﾄﾝという世界第二の油脂生産高を誇り、50%をマレーシア、30%をインドネシアが占めている。特にマレーシアでは、機械、木材に次ぐ第三の外貨獲得元である。

その安さ、高品質がこれほどの需要を支えているが、事実、パーム油は目に見えぬが、日常生活の実に隅々にまで浸透している。92 年の数字では、マーガリンなどに６万ﾄﾝ。ショートニングに５万５０００ﾄﾝ。即席麺や外食店の揚げ油に４万３０００ﾄﾝ。レトルト・冷凍などの加工食品に 15 万ﾄﾝ。石鹸や洗剤に１万５０００ﾄﾝ。工業用潤滑油、樹脂、塗料、口紅などの化粧品、医薬品に４万６０００ﾄﾝ、他１万ﾄﾝが使用された。

コマーシャルなどからは、石鹸や洗剤に油ヤシ製品が集中していると思いがちだったが、実は、ほとんどの食品に使用されている事が分かる。

この問題の特異点は、「環境に優しい」「健康志向」を標榜する組織においても、油ヤシ製品が堂々と売られるほど、ほとんど誰もプランテーション問題に気づいていないことだ。

≪人を殺してまで‥≫

マレーシアでは、パーム油生産量をここ 40 年で、なんと 100 倍にも伸ばしてきた。日本の輸入量も 85 年の 16 万ﾄﾝから 95 年には 35 万ﾄﾝと急カーブを描く。既に、油ヤシプランテーションの面積は 220 万 ha を超えた（東京都の 10 倍以上にも相当する！）。そして今、油ヤシの主役の半島部には土地開発の余地がない。そこで近年より、大規模開発が推進されているのが、伐採の終わりかけているサラワクなのだ。

昨年 12 月 19 日、サラワク州ミリ省バコン地区ロマ・バンガ村。村をプランテーションに代えられてなるかと、バリケードを張っていた数百人の住民に対して、警察が発砲した。先住民族イバン人のエンヤン氏（40 歳）は、頭部に銃弾を受け、ミリ市の病院の集中治療室へと運ばれた。そしてクリスマスイブの夜、妻と二人の子どもを残して帰らぬ人となった。クリスチャンの家族にとって祝福すべき日は、今後悲しみの日に取って代わられる。

私たちは今後も「環境に優しく」「健康志向の」生活を続けるのか？　環境に優しい生活の裏側では、一ヶ所最低 3000ha の森が切られ、あるいはインドネシアのように焼かれ、抵抗する村人は弾圧される。そして、プランテーションだけが森林火災の唯一の原因と断言はしないが、今後もエルニーニョのたびに、何度でも火災は発生するだろう（インドネシア政府も、今回の森林火災の原因の 75%がプランテーションと認めている）。

覚えておいてほしい。森の先住民族の更なる苦難はもう始まっていることを。メディアは何も伝えない。だが、確かにそこには「伐採はまだまだ」という声が存在している事を。

◆世界の森から……

アマゾンの森燃ゆ ―森林破壊とCO_2発生量増加

●インターネットで判明したが、人工衛星ノア１２号のデータをまとめたブラジルのＩＮＰＥ(Nationan Institute for Space Reseach)の火災地域の分析によると、1996年が９７年にかけてアマゾンで火災が拡大している。９７年の火災件数は44,734件。特に８～10月には各１万件以上の火災で、アマゾンの森が失われている。９６年に比べ９７年は５割増。原因は経済活動の増加、牧場開発による森への放火。加えてエルニーニョ現象で雨期が遅れ、乾期が増えているのだ。

９７年からの火災は、衰えることなく拡がり、９８年は最悪になりそうだ。９８年ロイター通信によれば、アマゾンの熱帯林が広がるロライマ州では、この２ケ月間に大規模な火事が続いている。人員・資材不足で現在も鎮火のめどが立っていない。これまでに９０万haの農地が被害を受け、火は先住民の居住地まで広がっている。干ばつで食糧不足だという。ある関係者によると、「サバンナ地帯では農地が全て燃えた。現在は森林が心配。生態系は元に戻らないだろう」と述べている。予報では、エルニーニョで４月まで雨がないらしい。だが５月から乾期なのだ。(西岡)

アマゾン大火災

60万㌶焼失 なお延焼中

【メキシコ市17日根本太一】約500万平方㌔の熱帯林を有し「地球の肺」と言われるアマゾン地帯で火災が続いている。ブラジル北部ロライマ州のアマゾン地域で、州政府は17日、非常事態を宣言した。すでに60万㌶を焼失したが干ばつで炎は衰えず、一帯の先住民居住区も危機的状態にあるという。

消防用ヘリコプターの調達などで計1200万㌦が必要とされるが、連邦政府は200万㌦の支援を決めたばかり。州政府はさらに10万㌶が焼失するのは時間の問題と訴えている。

煙害のため児童の呼吸器疾患が目立っている。農耕先住民は土地を失い、弓矢による狩猟先住民、ヤノマミの保護区でも動植物が絶滅の危機にひんしている。

▲3/19 毎日

ブラジルの
アマゾン川流域

森林伐採規制を強化

7地域国有化し資源保全

【サンパウロ20日＝野間清尚】ブラジル政府はアマゾン川流域の森林伐採の規制を強化する。アジアなどの業者によって無秩序な伐採が行われている七つの地域で森林を国有化。国の管理下で環境と資源保全に配慮した計画的な伐採を実施する。

七つの地域を新たに国有林化することで、アマゾン川流域の国有林面積は従来ある分と合わせて約千五百万㌶となる。ブラジル政府は今後六年間でこうした国有林を拡大し、同流域の森林面積の約一〇％に相当する約四千万㌶にする計画だ。この地域では国の許可がなければ森林の伐採ができなくなる。

また、民間の資源会社、バレ・ド・リオドセ社もアマゾン川流域の先住民居住地区の約千四百㌶を対象に約四十万㌦を投資して、伐採品目が一つに偏らないよう多品種の樹木を計画的に伐採、出荷する事業を始める。同事業には世界銀行の資金も活用される。

世界最大の熱帯雨林を抱えるブラジルでは、住民が農耕地を拡大したり、アジアなどからの業者が安い森林資源を手当てするために、アマゾン川流域で森林を無秩序に伐採する動きが増えている。九五年から九七年の間だけでベルギーの国土面積の二倍に相当する約六万平方㌔㍍の森林が消失しており、資源保全を求める声が強まっていた。

▲2/21日経

猛火迫るアマゾン

ブラジルのアマゾン森林地域で大規模な火災が発生し、18日、地元ロライマ州知事らがヘリコプターで現場を視察した。同州の森林の21％がすでに焼失した。少雨のためさらに燃え広がるとみられ、現地住民の生活の場を大きく破壊しそうだ＝ロイター

▲3/20 朝日

●連載⑤ 最終回

カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて

● 黒田洋一（熱帯林行動ネットワーク事務局長）

≪北米公聴会で≫

「北米公聴会」の席上、私も日本市民として（同時に北米の森林の重要な「ステイホールダー」として）の「証言」を行いました。

私は、「この百年以上にわたる“近代化”と経済拡大路線の中で、満州、樺太を手始めに、世界の多くの森林資源を輸入し、破壊に貢献してきた日本社会の最大の問題は、極端な機械工業の輸出振興策により自然と機械の交換という貿易パターンを拡大してきたことである。それは、古代メソポタミアなどの都市国家による森林破壊のプロセスに似ており、このような工業化や技術の方向を根本的に変えない限り、資源輸入の圧力を軽減できないことである。現在は、日米貿易摩擦に象徴されるように、資源輸入を“持続可能社会”の立場から見直そうとすると、ただちに貿易不均衡問題に跳ね返り、国内・国外から異論がでてしまう政治経済の国際関係の実態を見直さねばならない」と、主張しました。

コミッションからは、「では何が解決策なのか」と問いただされて、「基本的に産業発展の方向を根本的に変えていくこと、農林業や日本の自然資源を活かす方向に転換し、行き詰まっている日本の産業社会を“持続可能型”に転換するような“公共事業”に今後力を入れること、それは日本一国だけではできることではなく、とりわけ北米との関係を見直すべきだ。」と話しました。これに「もっと現実的な解決策を提示して欲しい」という主に欧米の委員の見解と、「これこそ委員会が検討すべき真のテーマである」という途上国の委員の間で分かれていました。

ウッズホール研究所員の同委員会のコーディネーターは、「私の証言は非常によく根本問題を説明している。これこそ、委員会が検討すべき隠れたテーマなのだ。」と評価してくれました。私の発言は、途上国の委員やカナダの先住民の人々からは賛成し、評価してくれる人が多かったことが印象的でした。オジェブエの人々は私が日本からやってきた重要なメッセンジャーであると評しました。実際、カナダの先住民の人々は、世界が直線的な西欧文明の考え方から脱却し、循環的な世界観にたち戻らねばならないことをあらゆる機会に繰り返し主張していました。そのどれもが感動的な発言でした。しかし、そのことを本当に理解するならば、現在の工業社会は循環型ではあり得ないことで、産業システムや科学技術の方向が根本的に変わらねばならないことを、どこまで人々が真剣に考えているか、が問題です。

≪日本」に関する議論≫

日本ではもともと岩や老木などの自然物を崇拝する自然信仰が文化の基底にあり、さらに仏教や神道などに伝承されている一方、今でもイタコなどの形で古い信仰形態やシャーマンのような存在が残っています。自然信仰は神社のご神木のような形で残っているものの、実際は神道の「おはらい」は自然破壊を正当化して、その神様の怨霊、たたりを直すこと」などを主張しました。持時間が5分しかなかったので、十分意図が伝わらなかったきらいもありますが、コミッションの委員の間では、“現実派”は「実現不可能な話である」と考えたかもしれませんが、しかし免罪符を免れるために利用されているように思えます。

バンクーバー島にあるある日系製材工場では日本の神社用の木材が加工され、毎年神社の関係者が「おはらい」の儀式を行っているそうです。「地鎮祭」も土地を開発で破壊することを正当化していますし、農薬工業会は毎年「虫供養」の儀式を行っています。本来、カナダのファースト・ネーションの人々と自然観やシャーマニズム、アニミズム、循環的な世界観を共有するはずの日本で、これだけの破壊が行われてきたことの思想的、信仰上の問題を明らかにする必要があると思われま

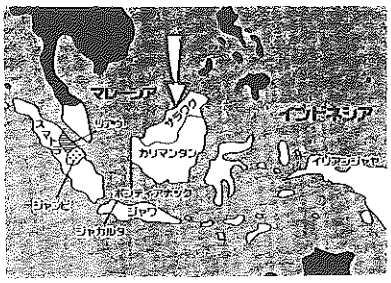
す。

このような問題をこの３日間で、様々なＮＧＯの活動家やファースト・ネーションの活動家と議論したところ、バンクーバー島のトフィーノから来たファースト・ネーション環境ネットワークのある活動家は、日本にぜひ先住民代表団を送り、日本の精神的、宗教的リーダーを訪問して話し合い、支援を求めたいと提案していました。様々な矛盾をはらんだ日本の宗教界に果たしてメッセージを伝える有効的な方法があるかどうか、考えこまざるを得ませんでした。もともとアイヌの活動家とはこれまで何回か交流のあるこれらの地域ですが、日本の古い文化や最近の精神的なものを求める若者たちを含めて、新しいカナダと日本の関係を作っていくヒントがこの中にあるかもしれないと感じ始めています。

【おわり】

P.S 黒田さん 長い間 ありがとう ございました ウータン

森に火をつけたのはだれ？



HUTAN NEWS

焼け跡に涙は枯れず

森林火災 2カ月

２カ月前に始まったインドネシアのカリマンタン島（マレーシア名・ボルネオ島）の森林火災は、地続きのマレーシア領内にも飛び火し、サラワク州では６日までに658世帯が焼け出された。同日、住んでいた家が延焼した少女は、両親とともに家財道具を運び出そうとして泣き出してしまった＝写真・ロイター。この地域は、インドネシア、シンガポール、マレーシアの３カ国が共同で消火にあたることになっている。被災者の大半が不法占拠居住区の貧しい人たちという。

▲'98.4.7 毎日

REPORT '97. サラワク スタディ ツアー "イバン人の村を訪ねて" その②

あつい情けに泣けたぜサラワク

【ウータン】 荒木 琢磨

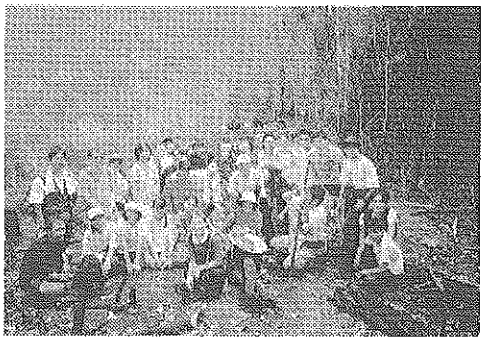
●広大な焼き畑の谷

彼らイバン人の生活の糧は昔からの伝統的焼き畑農業である。ロングハウスから歩いて15分位の所にバダさんの畑はあった。2ヘクタール位の山の斜面は既に樹木が焼かれた後で真っ黒に焼けた太い幹が倒れている。ここに今日は野菜の種を植えていくのだが、何しろ急斜面であるのに加えて、径5㎝位の棒で穴をあけつつ登っていくので、僕は直ちに全く役たたずの男になってしまう。タフでなければ生きられないのだ。

斜面を登りきって周囲の山を見れば、こうして焼き畑地として用いられてきた所ばかりだった。去年使った土地はまだ背の低い草木しか生えていないが、数年前の所ならちょっとした大きさの樹木は生えている。ルマ・レンガンの周囲の山々はほとんど一度は焼き畑としてつかわれている二次林のようだった。

バダさんの畑は家族5人の1年分の糧を生み出す土地である。種は野菜用の土地には野菜を、お米用の土地にはお米だけを蒔くとのことだった。普通の米8、もち米2の割合である。棒であけられた穴に5粒程の種を入れていくのは女の役わりである。小さな女の子もせっせと山を登り下りをしてコントロールよく穴に種を入れていく。種を入れた穴は土をかぶせたりしない。

ところでこの焼き畑農業、マレーシア政府は環境破壊の元凶という見解の下に無くしていかねばならない事としている。旅の最後の日に行ったサラワク州都クチンの森林省の森林博物館の展示のキャプションにそう書いてあった。SCSのロングハウス生活向上プログラムにも焼き畑農業から有機農業への転換をはかっていく部分がある。アジャさんは日



本のアジア学院で有機農業に関する勉強をしておられたこともあるのだ。

しかし、「熱帯林の中で行われる農業でこれ以上に適した農法はない」という研究がある（イブリン・ホン「サラワクの先住民」の参考文献）。これから有機農業がサラワクに適するかどうかの真価が問われていくのだろうと思われる。

●イバンネーム！！

ルマ・レンガンの人達の友好のための工夫はとても勉強になる。例えばイバンネームがそれだ。26人のツアー参加者のそれぞれにイバンの神話の中の神々の名前を付けてくれるのだ。

われらが荒川さんに付いた名前は偉大な神にして犀鳥の化身シンガラン・ブロン。若い男たちに囲まれていつも人気者だったI君（学生・男性）は、イバン神話の中でもっとも人気のあるお人好しのアパイサリー。女性はその美しさで有名なクマンの名を付けられた人もいた。因みに私に付いた名前はワニの神様リーバイ。

レンガンさんの娘でいつもいろいろと親切にして下さったルミさんが「あなたに付いた

名前は何だったの」と聞くので「リーバイ」と答えると、なるほどとうなずいていた。やはり俺の顔は爬虫類系なのか？。でも嬉しかった。

これ以降みんな私の事を「リーバイ」と呼んでくれた。こうなると返礼で日本の名を付けてあげない訳にはいかない。一番に付けたのは今回の日本人の訪問に合わせて奥さんの実家であるこのロングハウスに来ていた中国人とイバン人のハーフのリン氏。彼のお腹はこのロングハウスの他の男達の鍛えられた美しさとは違って、見事に出っ張った美しさをもっていたので、布袋さん！。
味か？」と聞かれたので、「豊穣の神様のことだよ。」と答えたら「そりゃ肥満の神様だな。」とバレていた。

それからシブの町に近いロングハウスの出身で、我々といっしょにルマ・レンガンを訪ね、いつもイバンの人達みんなをおかしなことを言って笑わせていたエンタイさんは大阪のお笑い芸の老舗にあやかって、ヨシモト。

いつも高い大きな声で「食べて食べて！」と食事を勧めるおカアさんには大美人の神様ベンテンの名をさし上げた。果たしてどう感じていてくれただろうか？。

● *キャッサバのはなし*

レンガンの人達は、私達を森や川のいろいろなところに案内してくれた。ある日は川で魚の追い込み漁をするのに連れていってくれ、取れた魚を焚き火で焼き、ご飯を炊いて河原で大昼食会となった。この時に、ついでに取った田螺の大きいのを煮たやつは、細長い巻き貝になった先端が、身を吸い込む為の空気穴として煮る前に割られていて、勢いよく吸い込むと田螺のおいしい身が素晴らしい風味といっしょにスポッと飛んで出てくる仕掛けになっている。実にうまかった。

川のまわりは全てが深い森で、踏み分け道が所々から始まっている。食べることのできる甘い実のなる木が幾種類もあって、「これも食べられるよ。」「あれもおいしいよ。」と教えてくれる。中には、「これはお腹の薬になるよ。」ととても苦くて、エグイ味のする豆（でっかくて長い鞘に入っている）を取ってきてくれたりした。

焼き畑の見学の帰りには、「サゴヤシの中にいる虫がうまいんだぞー」と、若い男の子たちが張り切って黄色い幼虫（ヤシオオオサゾウムシといって、日本では同じ類がクリの実や幹にいたりする。日本でも食べている地域がある。）を取ってくれて、「こうやって食うんだ。」と手本を見せてくれる。頭をつかんで軟らかい身の方を食べるらしい。荒川さんをはじめ私達も幾人かが頂いたが、ウニュウニュ動くのを耐えて口にすれば確かにとても甘くてジューシーだった。わたしは３回「ギャー」と叫んでから食べないとだめだった。ルマ・レンガンの若い女性は気持ち悪がって「おえっ」とか言っていた。虫を食べるのにも人それぞれ姿勢が違うようだ。

そして森の中には、焼き畑以外にも畑がある。それがキャッサバ畑だ。背が高くて細い幹に大きな葉っぱという特徴的な姿で、並べて植えられているのですぐわかる。

この地面の下には大きなイモがあって、掘り出すと本当に立派な塊になっている。これを５本も持ってかえると、ロングハウスのみんなで食べられる位の量になる。帰ってしばらくくつろいでいると、「さあーおやつだよ

ー」と蒸したの、焼いたの、煮たの、炒めたの、と様々に調理されたキャッサバ三味。これに養蜂で集めた蜜をかけて食べるとこれが又うまいうまい！！。ついでに生の蜂の巣も食べさせてもらった。

と、その時アジャさんから説明が始まった。「皆さん、今皆さんはおいしく召し上がっていますが、このキャッサバは第二次大戦中に日本軍がサラワクに来た時、住民の食料を徴発してしまった為、住民が飢えをしのぐ為ににこれしか食べるものがなかったというものでもあることを知っておいて下さい。」

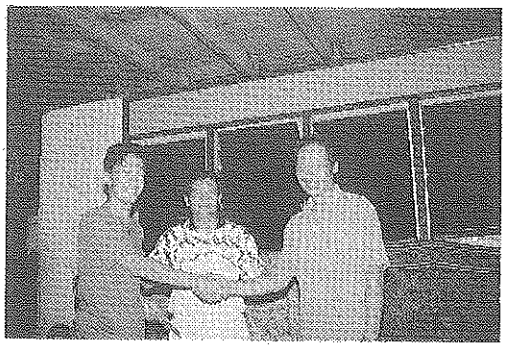
これには私も参ってしまい「まったく、なんてことをしてくれるんだ！」とそこからは何も食べられなくなってしまった。

● *涙・涙の別れ*

こんな楽しい日々を過ごしていたのも束の間、明日は別れの朝という最後の夜、まとめの会が持たれた。

トゥアイルマ（ロングハウスの代表者）のレンガンさんをはじめ、社会開発委員長さんやアジャさんの挨拶があってから、日本人一人一人が挨拶をした。できる限りイバン語で！！。かく言う私もビライさんとバダさんの助けを借りて、イバン語の作文をした。

内容はだいたい「このロングハウスの皆さんの温かいもてなしに感動しました。美しい森や川に囲まれていろいろな経験をさせてもらい、おいしいご飯を頂き、水浴びをし、お酒を飲み！何にも代えられないすばらしい体



験でした。日本でこの多くの学びを友人と分かち合いたいと思います。」というようなことを言ったと思う。

最後にこのロングハウスの水道水供給（近くの泉からパイプで水を引いてくる。）プロジェクトに役立ててもらうように、有志で集めたお金をレンガンさんに渡すとみんながみんなと握手する握手合戦が始まりそこからスゴイ盛り上りの大サヨナラパーティーが始まった。みんなドンドコ太鼓を鳴らし、それに合わせて踊り歌いお酒を飲んで眠るまで別れを惜しんだ。「こりゃー明日泣いてまうな・・」と踊りながら思った。

朝が来て、誰かに脇を抱えられて寝床から起き上がらされた。もう別れのマリンバの音がしている。途端に涙がポロポロ落ちて来て止まらなくなった。泣きながらビスケットをいただき、お茶を飲んだ。楽園追放ってこんな気分なのかな？と思った。別れがこんなに悲しいのははじめてだった。それだけ彼らが温かい人達だったのだろう。泊めていただいたビライさんのお母さんのジャバイさんにお別れとお礼を言った。彼女も僕からもらい泣きしていた。

下りは6時間でバタンアイに達し、そこからクチンまでバスをすっとばして帰った。

以上が、私のサラワクの旅だった。お世話になった荒川さん、アジャさん、ルマ・レンガンの人々、いっしょに旅した人達に感謝したい。最後まで読んでいただきありがとうございました。

［おわり］

ウータン総会があったヨ！

2月8日　中央青年センター（文責・牛田）

今年もウータン総会の時がやってきました。熱帯林の伐採問題のみならず、ヤシ・プランテーションや早生樹造林の問題、ロシア等の北方林伐採問題など、グローバルな視点を踏まえつつ、今年のウータンはどーするの？と話し合ったわけです。事務局から自治体キャンペーンをはじめ各種の活動、広報、会計の報告と提案がなされました。しかし、そこはなんせ慢性的に人と金が不足しているウータン、提案の目玉は人と金に関する事でした。ホンマかいな、

新たに賛助会員制度を作って、それは年会費を5千円にしたらどう？参加しやすくする為に、定例会議以外の火曜日で事務所を開ける日を設けたらどう？……しかしどちらの提案も、やや発想に難あり、もっと検討してからにしなさい、となりました。また、調査活動で「翻訳してくれる人募集」って言うけど、「○○を翻訳して下さい」とか、もっと具体的に明示した方がいい、との指摘もありました。通信に連載していた猪俣栄一さんの「熱帯林を考える」を出版社に売り込んでみるつもりだ、とスタッフの篠宮サン。あとそれから、以前呼びかけて集まった「プナン基金」が約21万円あるそうです。その内10万円を、弾圧されているサラワク先住民の裁判支援に、日本の団体を経由せず直接送ることになりました。

ウータンの、そのウータンらしい特徴みたいなものにひかれるから会員しているんやで、他の団体と同じことやっているのなら、他の団体の会員してるで、という意見がありました。これは、ネットアプローチなど温暖化に関係する問題や、ヤシ・プランテーション、ロシア等のタイガの伐採などなど、新たに対応を迫られる問題のキャンペーンを、どないしよ？という議論での意見です。ウ～ン、なるほど、するどい！でも、これはボクの意見ですが、ウータンは何をやってもウータンや！

いろんな人が様々な意見を交わすという事は、とっても大事なことです。ウータンにお便りを下さい、事務所を訪ねて下さい。あなたのご意見をきかせて下さいね。

（紙面の都合でゲストのことを書けなくなっちゃいました。ごめんなさい。講師の大田伊久雄さん、ニカラグアから来られたアルバート・シンクレアさん、来て下さって、感謝、です。）

熱帯材使用削減・環境保全への自治体キャンペーン

◆ 大阪府編

● 事務局長・西岡良夫

《大阪府‥回答で「熱帯材削減目標年度平成１３年」の記入者が不明‥どないなってるねん？》

９７年４月に大阪府下全自治体にアンケートを依頼した。結果は『ウータン４５号』に。それで大阪府と門真、枚方、箕面各市と話合いをしようと、７月より進めてきたが、返答が遅〜い。とりあえず、９月22日に環境局と話し合う。

環境政策課の中山主査は「アンケートの熱帯材・建築物の環境配慮の項目は、営繕室に記入してもらった。熱帯材使用削減目標年度も記入してもらった」とのことで、新たに建築部営繕室との話合いを持つことになった。

それで営繕室・平田係長に電話する。「目標年度はうちで書いてまへん。決まってないのに、おかしいなあ」とのことだった。

《７５％熱帯材使用削減までもうちょっとや！ ９６年度で７４％削減の大阪府》

やればできるんや！　営繕室も使用削減を進め、土木部も企業局も約束を守り、コンパネ使用量を今回は把握してた。私が前回９６年４月に久しぶりに怒ったのがウソのようだ。それも、９６年に７４％の熱帯材使用削減を大阪府は実施していたのだ!!!

応対は、営繕室・杉本参事，平田係長、土木管理課・平井主幹、企業局管理課・木島主幹。

Q1-1)熱帯木材使用削減目標は、アンケートに「目標年度有り・平成１３年・７５％削減」とのことですが、いつ決めましたか。

1-2)中川前知事が９２年の記者会見で「熱帯材を現在より７５％抑制を目標」と述べ、今回の回答に「熱帯材396,000㎥、複合・針葉樹合板1121,000㎥(単年度削減率７４％)」とのことですが、９２年に比べ何％削減ですか。使用総量も教えてください。

1-3)昨年の懇談で土木部、企業局は使用量をまとめていないとのことでしたが、今回のアンケート数値に含まれていますか。

A1-1,2)杉本参事:「熱帯材使用削減目標を立てていません。営繕では設定していないのに、なぜ平成１３年と回答したのか、不明だ。削減努力として、平成５年度に５億円以上の公共工事につき熱帯材削減としていたが、平成９年度に１.８億円以上と引下げ、事業の９割以上をしめる。平成４年の削減は０。

1-2)の質問ですが、平成年度に７４％抑制となった。平成４年からみれば７４％削減となった。複合合板も25％分を熱帯材にし、代替の鋼製型枠、ＰＣ工法等の面積を針葉樹合板と換算したので、実質値だ。」

1-3)「含まれてません。土木部は408,000㎥で、企業局は27,500㎥(平成８年度)です。」

《物質エネルギー量・CO_2排出量の1/3が建築物!! 環境配慮型建築物のモデルを》

Q２.公共事業の建築物への環境負荷の配慮

2-1)省エネ・省資源化施設は具体的にどれくらいになったか教えてください。

2-2)環境負荷配慮の施工作業実施について回答では「ＰＣ工法等」でＰＣ以外は何か。

2-3)で回答の「路盤材の再生資源」の具体例

2-4)長持ちする建築物の建築抑制について回答では「一般的な取組み」とあるが何か。

A2-1)杉本参事は「導入・実施を含め、モデル的で分析するに至ってない。どれだけ効果あるかは今後による。」

2-2)「ＰＣ工法以外金属メッシュ型枠などで、建築部では環境管理計画は今はない。」

2-3)「再生アスファルトでの敷地道路への利用や下水汚泥、ガラスビンの試行など。」

2-4)「主管課であり、依頼があれば行う。公公共建築耐久性建築物は特にしていない。」

参加した大西弁護士は、「１年前の話合いより随分進んだし、造るならそろそろＰＲできるものを」と言い、永田さんは「これからも頑張ってや」と、励ました大阪府でした。

山からの便り……Part Ⅱ

炭焼き百姓はおもろいなァ〜。

③「雪国の巻」

H.ICHII　市井晴也

［イラスト］はるや＋のぞみ

長い冬

ここ守門村は12月（早ければ11月）から4月頃までの約半年間、雪に包まれます。

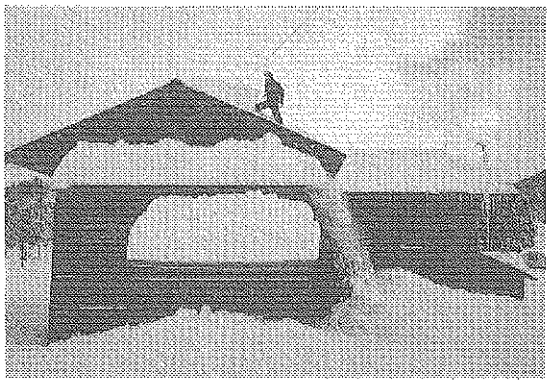
積雪は3m前後が多いようです。昔は5mを越えることもよくあり、電線をまたいで歩いていたとか。Iターン1年目の冬は10年来の大雪だそうで4m半位積もりました。雪下ろしは9回。初回、慣れぬ作業に見兼ねて近所の老夫婦が手伝いに屋根に登ってきてくれたりもしました。2人で1日かかっていた雪下ろしも今は1人で2〜3時間で済むようになりました。積雪が自分の背丈を越える前に下ろしてしまうのがコツです。雪を下ろさないと家が歪み、あちこちの戸が開かなくなります。

雪下ろしで大変なのは実は雪を屋根から下ろすことではありません。その後の雪片付けです。上から見てL字型の我が家の場合、内側の「抱き」と呼ばれる所は3、4回もすれば下ろした雪が屋根の高さになってしまいます。雪を下ろすのに邪魔な雪を削って周りに押しやる。この下ろした雪の片付け場所がなくなってくると面倒です。雪を掘り上げるしかなくなってきます。茅葺き屋根の頃などは周りの雪を段々に掘り上げていくのが常であり、その為ここらでは雪下ろしのことを「雪掘り」と言います。

玄関は雪の階段が7段位できます。2階の窓を横目にしつつ、そこから道路までの50m弱はカンジキを履いて道踏みです。日に2度するときもあります。

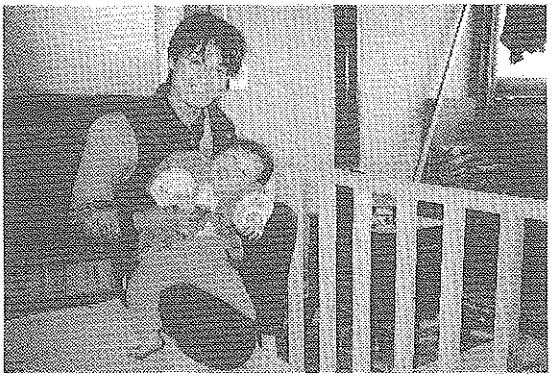
と、こんな風に書いてくるとさぞ大変そう

雪下ろし。この積雪は多い時の半分ぐらい。



ですが慣れてしまえばなんてことはありません。動けば指先意外はすぐ温かくなるし、重労働でもありません。ただ、単調で飽きます。農業も炭焼きも雪片付けも必要なのはやはり「根気」だなあと思います。

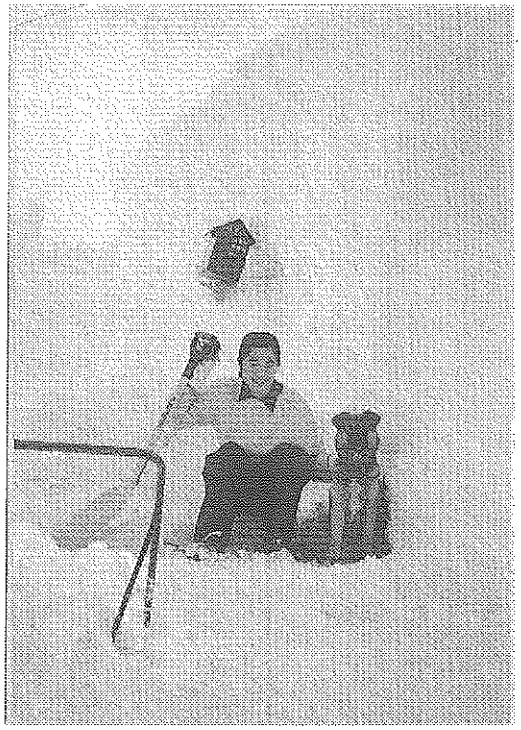
道路は除雪が行き届き車で移動できます。炭焼き窯へも車で10分かかりません。また今はほとんどの家が道路のすぐ脇ですし自動落下式の屋根や融雪設備のある家も増えてきていて、雪国の難儀さは随分軽くなっているように思えます。



薪ストーブの前で。薪集めは冬仕度の大事な仕事。そうちゃんと……

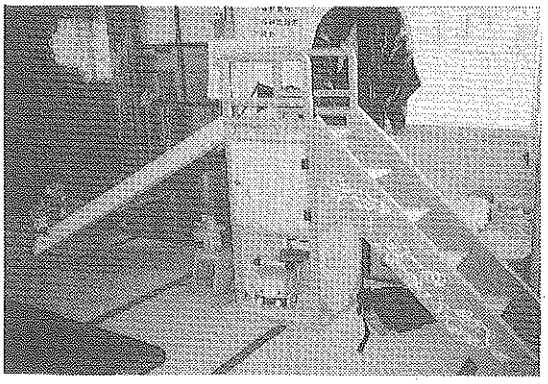
まぶしい雪景色。夕日でオレンジに染まる山々。星だらけの夜空。薪ストーブにゆらめく炎。腰まで温まる掘り炬燵。新米を食べ

▼道路から下っていく我が家への道は雪の昇り階段となる。



（動物は寒くなるとたくさん食べることがよくわかる）、慌てず春への英気を養う季節。僕は最も好きな季節です。

村では「発展」の妨げのようにとらえられている雪。余計なものを入り込ませなかった功績はかなりのものであると僕は思います。人間が何も彼もをやりたいようにはできない、というのは素晴らしい。きれいな水、静かな夜、自然に添う暮らし等、きっと多くのことが雪によって守られてきたのでしょう。



▲すべり台をつくった！こういうことは冬の農閑期にしかできない。

■美名？悪名？「魚沼産コシヒカリ」

ここは御存知「魚沼産コシヒカリ」の産地です。残念ながらその名はもはや商業用のブランド名になってしまった感があります。

生産量の10倍が市場を出回っているという話しには驚きました。しかもえらい高額で。半額位のお米もいっぱいあり、同じ新潟県内でも地域によって値段が違う。100%新米ならどこのもかなりおいしい。精根込めてつくったお米が地域の差だけで安く買いたたかれることに憤りを感じているお百姓さんも多いことでしょう。

では魚沼の百姓がたんまりと儲けているのかというとそうでもない。生産者の手に入るのは新米で10kg 5千円前後。山間地では大規模化でコストを下げるのにも限界がある。機械、肥料、薬などの経費を考えれば決して割のいい仕事ではない。儲けているのは仲介業者。以前の産地直売の抑制やこれからさらに厳しくなる価格安定を名目にした減反や価格調整は農家の保護などというものではない。結局、農政が守ってきたのは商人であったのだと思われます。

少々横道に逸れました。ここらのお米のおいしさは半年も雪に覆われる自然からの恵みなのです。山菜でも甘味が違うのです。雪解けと同時に苗づくりを始め、雪が降り始める前までに収穫、脱穀、乾燥、籾すりを終える。冬の間は出稼ぎで家族と離れて暮らし、経済的な貧しさと単調で地味な労働に耐えながら小さな手のかかる田んぼで主食を作り続けてきたかつてのお百姓さんたち。お米の値段はそうしたことへの感謝の念であるとも思います。雪国だから生まれるもの、そのひとつがおいしいお米なのです。

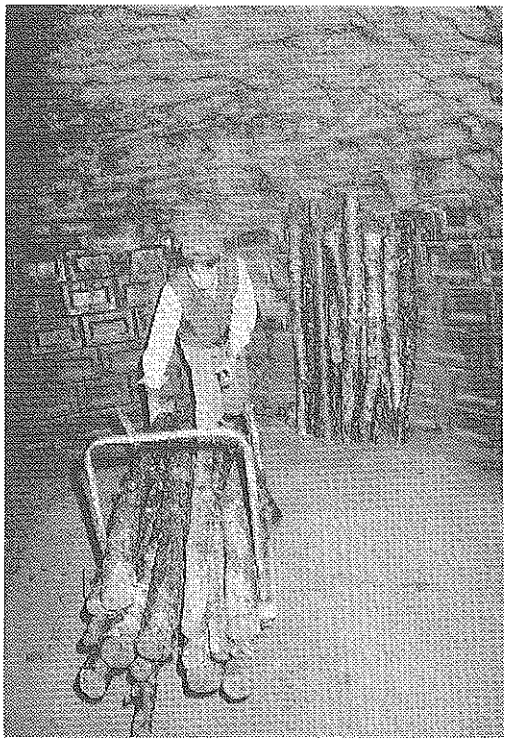
■冬仕事

冬、昔は雪片付けと囲炉裏ばたで翌年使う草履や縄を作るワラ仕事。お金になることがなく、とにかく貧しかった話しをよく聞きます。春から秋に炭焼きをしていても自分の家では使えず、わずかの薪をブスブスと燃やし温まる。山菜の塩漬けは貴重なおかず。兎や狸はたんぱく源。ひとつの玉子を兄弟で分けて…。でも別に暗い感じはなく、子供たちもみんなで外で遊んで楽しかったようです。

その後、出稼ぎが流行り（？）経済的には随分楽になったらしい。が、子供がなつかずさみしい思いをした、なんて話しを聞くとせつない。残された女衆も大雪の中、たくさんの子供を抱え難儀したことでしょう。

今は、じいばあはたいてい家でのんびり、若い衆は車で山を下りてお勤めをしています。森林組合の造林班はスキー場で働いたり、近場でお金を得ることができるようになり、皆ゆとりをもって生活しているように見えます。子供たちが外で遊ぶ姿はほとんど見られませんが。

▲今は引退した炭焼の師匠。
炭材を雪から掘り出す。



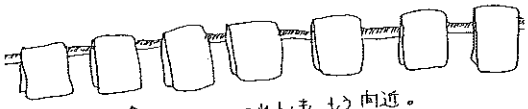
◀炭材を立て込む。二〇〇〇本位か。窯の中は暖かい。

僕は冬でも炭焼きをしています。秋のうちに炭材を集め雪から掘り出して使います。窯まで除雪車が来てくれますがごく稀に主道から15分位雪の中を歩いていきます。窯の入口の雪片付けが日課です。晴れた日は本当に気持ちがいいし、寒い日でもその分お風呂と夕飯が上等になります。なんでもないことに喜びを感じられます。真っ白い雪の野山はおともの犬たちの庭です。

■さいごに

部落には短所と思える事もあります。例えば自分の意見を持って議論するのに慣れていないこと。全体的に「受け身」であると感じます。特に若い男衆ははっきりしない人が多くてじれったくなります。それと男尊女卑の名残。女性は部落の集まりでも発言しないし、各種役職にもつかない。もったいない。でもこれらは特別この地域だけの問題ではなく、僕が腰を据えて生活を始めたから見えてきただけのことかもしれません。

炭焼きや農業をして思います。この仕事が生活をつくっていくための選択肢としてあまり選ばれないことが実に惜しい。国として、一人一人の意識としてもっと第一次産業の多様な価値が見つめらてもよい。それは第三世界を食いものにしている日本の経済至上からの脱却のカギでもあると思います。

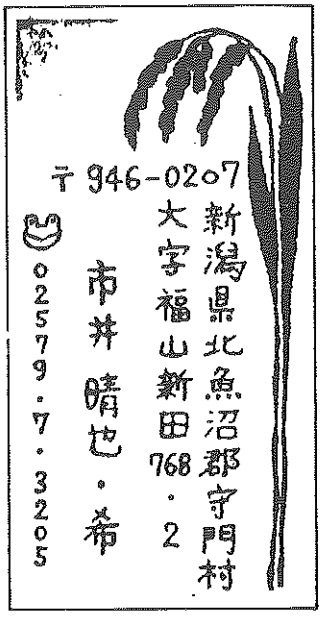


サラワクと守門村。あまりに遠く環境も違うけれど、自然に添って生きるという意味で通じることもあるだろうか。僕がここで喜びを感じ生きていける一方、サラワクでは生活が脅かされ続けている。負い目はある。僕は加害者のままだ。直接の運動から離れこういう道を選んだ以上、せめてできる限りお金より身体を使おう。山を騒ごう。土にはいつくばろう。雪に埋もれよう。精一杯。今の僕にできるのはそれだけだ。その為に僕はここに来た。

〔おしまい〕

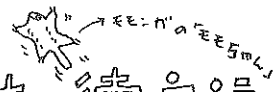
※貴重な紙面を戴きありがとうございました。

▶ごうんになった感想などお便りして下さい。



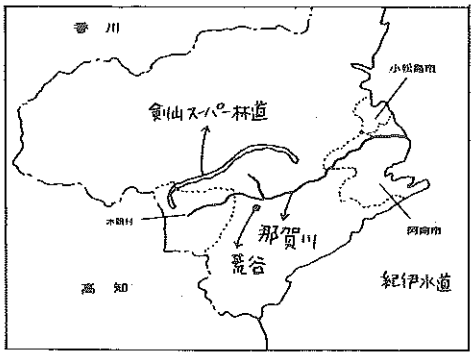
日本の森から ◆番外編

のぼった、くだった、川見た、山見た徳島行。



永田健一［ウータン］

◆何が訳のわからないタイトルですが これは昨年の夏に西岡と私がウータン紙上でもおなじみの徳島の猪俣栄一さんにひきつられ？ がけ足で回った徳島の川と山の見学珍道中でございます。 なんで又 そんな前のことを書くねんと お怒の声もありましょうが 次号から予定しています 猪俣さんの「熱帯林問題を考える」に続く「日本の森林問題を考える」（タイトルは未定）連載のプローグとして書きなさいということで こういうことになりました。 あくまで内容がございませんので 軽い気持でどーぞ…



◆お盆すぎに西岡氏と大阪港発で待ち合わせ小松島まで高速船で2時間 天気少々悪し、タラップを降りるとすでに猪俣さん 準備ばんたんで待ってて下さった。 着くなり「ほんまに来るか来んのか連絡ぐらい前にしとけ！」と怒られ、平あやまりで何とか出発 //スンマセン.
猪俣さんの車でまず阿南市へ入り R195号を走る途中から那賀川ぞいを走り上流へ向かう。
この那賀川の上流には 木頭杉の産地である木頭村があり、全国的に有名になった ダム建設を村民の力で止めたところです。
しかし この川は きたない！ にごってグレーの色をしている。 上流に行くまでに まず川口ダム、長安口ダムがあるからだ。放水口からはグレーの水が流れでている。 ダム湖の底には どっさりと泥や砂がたまっていると説明される。
又、発電用の施設も何箇所かある。 水の流れを止めると 川が死ぬことがこれほどよくわかるところもないだろう。 皮肉にも その内のひとつのダムはすでに土砂にうもれ 人工滝のようになり、水は流れていてきれいだった。
一日目の目的地は 上那賀町の長安口ダムにそそぐ支流がある 荒谷というところだった。

猪俣さんは この谷をダムの底にたまった土砂でうめるという県の計画に反対する運動をおこしている。 県道に車を止め山道を1時間余り歩く その道すがらには本当に貴重な自然が残されていました。
何としても残さねばならない自然だ！
この日はここで終る、猪俣さん行きつけの平谷の旅館へ向かう。
この旅館には一ぴきのモモンガの「ももちゃん」が住むというがついに姿は見れなかった。

二日目、小雨もよう、夏というのに肌ざむい。宿をあとにして木沢村からスーパー林道に向かう途中 治山事業としての砂防ダムの建立したところを見学、「ひどい。」急傾斜地に植林したあまり地盤がもたず、くずれ、止めるために砂防ダムをつくる。又くずれ、うまる。どうにもならない悪順環がここにある。
旅の最後は悪名高き剣山スーパー林道です。 なんと デコボコというもんじゃなく雨でえぐれヘタをすると車が入まるぐらいの道がつづく。日本最南にあるブナの立ち枯れが目立つ！ 最初からおわりまで猪俣さんの怒りがおさまらない徳島の川と山を見た3人の道中記でした。 あとは猪俣さんへ

ヨロシーク！

［おそまつ…］

『おたよりから』（敬称略）

＊会費３千円＋カンパ２千円。ちっとも労力を出しませんが、何とかウータンを読むことだけでもと思っています。　熊取町　川添純子
＊温暖化地球に保険かけられず／ＳＯＳ２１世紀の地球から　北坂英一
＊ＮＧＯはどちらさんも財政難ですネ。年会費＋カンパ振込みます。「炭焼き百姓」②おもしろかったです。化石燃料の機械文明に頼らざるをえないのが悩みですが、草刈り機・耕運機くらいはいいのではないでしょうか？　門真市　松本剛一
＊ウータンの会報が送られてくるたびに、私も怠けていられないと思わされます。関西　のいろんな自然保護団体との共同イベントなどで、ウータンのＰＲをしてはどうでしょうか。　伊丹市　麦島貴美子

……

［会費・カンパをいただいた方］（敬称略）　９８．３．２４まで
荒川共生　井口博　池田光司　井下祥子　上田真弓　鵜川まき　馬谷憲親　大田伊久雄　太田充栄　大西裕子　大野浩史　大東弘　奥村知亜子　加賀瀬みどり　春日直樹　春日美恵子　加藤菊緒　加藤昌彦　川添順子　北澤新　北村千枝子　倉友克美　小林圭二　五味義明　佐藤正行　佐野徳子　千賀美樹子　寺川庄三　永田展雄　中司幸則　西岡良雄ノーニュークス・アジアフォーラム（佐藤大介）　田岡めぐみ　高橋敬一　田中順子　津田妍子　土屋英男　西園千春　恒成和子　中島小夜子　苗村真代　中村義明　畑章夫　伴正己　萩原久美子　橋本君江　東のぞみ　平野誠　福田敦　藤村はるえ　古川文月　本田次男　本領宏子　三澤文子　水田哲生　見取徳明　向井千晃　明周正和　森石香織　柳下恵子　山川信恵　山崎大　山中浩一　吉田千里　米沢興治
☆「ウータン財政ピンチ！」の呼びかけにこたえて、会費・カンパをありがとうございました。まだ会費をいただいていない方（不況で大変とは存じますが）、よろしくお願いいたします。

［裏がえし封筒ありがとう］　猪俣栄一　鈴木逸子　（敬称略）

プナン基金について（ご報告）

１９９３年、森林伐採に非暴力で抵抗するサラワクのプナン人のために、『プナン基金』を募ったところ、会員の皆様さんから約２０万円のカンパが寄せられました。しかし、送金する前に、抵抗運動は弾圧され、その後、カンパを活用する機会がないまま、事務局でお預かりしておりました。

今回、・プランテーションに土地を奪われることに抗議し、射殺されるなどの被害にあったイバン人（プナンと同じサラワクの先住民）へのカンパに、このうち１０万円をあてることを総会で決定いたしました。また必要に応じて残額もカンパすることを検討しています。

カンパをお寄せくださった方には、使途の変更を事後承諾していただく形になりましたことを、お詫びとともに、ご報告いたします。

ＰＲ：『熱帯林連続講座ｉｎとよなか』報告集（500円＋送料190円）
発売中！！（残部僅少）　申し込みは下記まで（切手可）
〒560 豊中市玉井町2-4-35-306　井下祥子（06-841-8221 夜）

HUTAN ACTION SCHEDULE

'98 アースデイ イベント

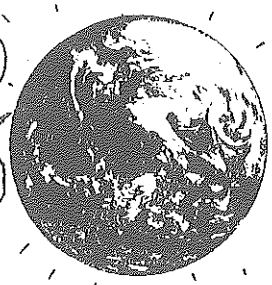
— 市民がつくるアースデイイベント —

『暮らしの中のエコライフ』

やりまっせ

ECO LIFE

みんなで考えよう地球のこと!



Less CO_2!

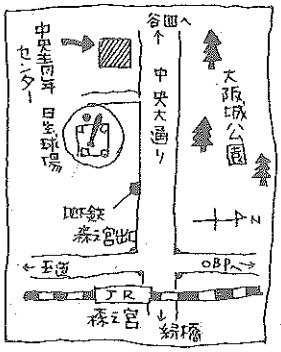
【時】 4日26日(SUN)日

1:30pm〜4:40pm

【場所】 大阪市立中央青年センター 5Fホール

[Tel. 06-943-5021]

・JR, 地下鉄中央線「森ノ宮駅」下車、中央大通りを西へ歩いて5分。



◎講演 「深刻化する地球環境汚染 — 地球温暖化、ダイオキシン、環境ホルモン、そして人類の危機」

講師 / 和田 武(立命館大学産業社会学教授)

◎報告とディスカッション

- 環境家計簿発表 ……大阪府事業生活協同組合
- 熱帯材と環境共生住宅
- 自然エネルギー
- 市民活動(東大阪市民活動会議)

【主催】関西環境NGOネットワーク

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER